

奥州小道 〈节选自卷首〉

芭蕉

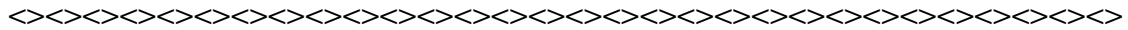
（翻译 李轶伦）

日月是千秋万代之过客，
时光亦是永不停步之旅人。
行舟驭马者一生四处为家，
终老于旅途之中。
自古风流墨客，
死于旅途者亦不在少数。
不知从何时起，我那向往漂泊的心
也像被风吹得漫天飞扬的云彩一样蠢蠢欲动，
把我几度带向海滨。
去年秋天，我回到隅田川边的旧屋，
拂去蛛丝，暂且住下。
冬去春来之际，
我心也随之欢欣雀跃，
耳边仿佛传来行旅之神灵的召唤，
叫人心神不宁，
唯愿身披春霞早日度过白河之关。
出行之意奔涌难挡，
便修补旧裤，将斗笠换就新绳，
于三里穴施灸健脚，
准备一切就绪。
此时，忽如松岛名月映现眼前，
顿感此行回归之日难料，

便把自宅托付于人，
暂居门人杉风之别所待发。
“他日归来时草葺屋也换新颜偶人饰房中”
以此为首句，又作齐表八句，挂于庵堂柱上。

松尾芭蕉 Matsuo Basho (1644-1694)

现三重县伊贺市人，日本江户时代前期的俳句家。他创作的俳句艺术造诣极高，被称为“俳圣”。松尾芭蕉广育门徒，喜好旅行，创作了许多优秀的俳句和纪行文，对后世的艺术家和文学者产生了深远的影响。关于松尾芭蕉的研究远及海外，其作品也被翻译成多种语言出版。如今，受芭蕉作品魅力的感染，不光是日本人，许多来自世界各国的芭蕉迷们不远万里来造访芭蕉游览过的地方，缅怀三百多年前的旅人芭蕉。



(日本語原文) **奥の細道** (冒頭の文より) 芭蕉

月日は百代の過客にして
行きかう年もまた旅人なり。
舟の上に生涯を浮かべ
馬の口とらえて老いを迎えるものは
日々旅にして 旅をすみかとする。
古人も多く 旅に死せるあり。
予もいづれの年よりか 片雲の風に誘われて
漂泊の思いやまず、 海浜にさすらい、
去年の秋 江上¹ (こうじょう)の破屋に
蜘蛛の古巣をはらいて やや年も暮れ。
春立てる霞の空に
白川の関² 越えんと
そぞろ神のものに憑きて心をくるわせ

道祖神の招きにあいて
取るもの手につかず
もも引きの破れをつづり 笠の緒 すげかえて
三里³ (さんり)に灸すゆるより
松島の月 先ず心にかかりて
住める方は人に譲りて
杉風⁴ (さんふう)が別墅⁵ (べっしょ)に移るに
「草の戸も 住み替わる代ぞ 雛^{ひな}の家」
おもて 面八句⁶ を庵の柱に懸け置く

- 1 江上……墨田川のほとり
- 2 白川の関……陸奥地方に行くときに通る関所があった場所
- 3 三里……膝頭のくぼんだ所で、健脚になる灸点がある。
- 4 杉風……芭蕉の門人の一人。日本橋の魚問屋、杉本元雅。
- 5 別墅……別宅。
- 6 面八句……百韻連句を書く懐紙の第一ページ目の八句。連句を書いた懐紙は柱に掛けておく慣習があった。

(参考：『松尾芭蕉集②』小学館, 東京, 1997年)

.....